

# 充実の地域資源の活用で職住近接のまちづくり 歴史と文化が調和したまちは暮らしやすさの宝庫

## 目指すのは恵まれた 土地柄故に生じる課題の克服

全国各地の豊かな自然環境(山・里・海・川・湖沼など)がもたらす優れた素材を基に、地域の人々が代々育んできた特産品の数々を、近年、改めて知る機会になっているのが「ふるさと納税の返礼品」だ。また、そうした特産品への再認識は、現代の日本人が全国各地の自然環境や地域の歴史へと、改めて思いをはせる契機にもなっているのではないだろうか。

例えば、今回訪問させていただいた岡山県赤磐市の返礼品で圧倒的な人気を誇っているのは、赤磐市発祥の「白桃」だ。とりわけ高級品種・清水白桃は、マスカット(シャインマスカットなど)をはじめとするブドウ類、岡山三大河川の一つ吉井川水系の清冽な伏流水と特産の優良酒米「雄町米」で醸した地酒(日本酒)などと並び、人気が高い。

当地での桃の栽培は2000年以上前からとされており、返礼品のラインアップを見ただけでも、赤磐市が古来、豊かな自然環境に育まれ、優れた大地の恵みを産出しながら、繁栄してきた地域のただ中にあるということが分かる。

赤磐市は平成17(2005)年3月7日、旧赤磐郡山陽町(現山陽地域)・赤坂町(現赤坂地域)・熊山町(現熊山地域)・吉井町(現吉井地域)の4町合併により誕生した。

赤磐市は岡山県南東部の東備地方に位置し、県都・岡山市の北東側に隣接している。

市域北部の吉井地域は吉井川に面しており、吉井地域からやはり吉井川に面する南東部の熊山地域にかけての市域は、山間部や丘陵地帯が多く里山が点在している。このエリアは黄ニラやゴボウ、ブドウ(吉井地域)、米や黒大豆、ブドウ(熊山地域)などの名産地として知られる。

また、市域中央部から南部にかけての平野

ともぎねたけのり  
友實武則  
赤磐市長



部を形成する赤坂地域および山陽地域には田園地帯が広がっており、市役所本庁舎をはじめとする中心市街地(商業地)や大型住宅団地などは、主に山陽地域に形成されている。このエリアは米や洋ナシ、ブドウ(赤坂地域)、桃(山陽地域)などの名産地としても知られている。

「ご存じの方も多いかと思われませんが、岡山県には『晴れの国おかやま』という愛称が



「晴れの国おかやま」の代名詞的存在・マスカットも赤磐市の名産



濃厚で上品な甘みが人気、「白桃」の最高峰・清水白桃



朝日米や酒造に最適な雄町米など赤磐市は高品質なブランド米の産地としても有名

の中心部から岡山市の中心部までは、車でも鉄道でも30分前後で到達します。その地の利が、赤磐市の人口規模の維持をはじめ、各種の都市的発展に多様な好影響をもたらす要因にもなってきました。

同時にその与えられた強みに甘え過ぎてしまうことは、今後避けては通れない人口減少の抑制を図る上で不可欠な、赤磐市の基礎体

白桃などの桃類、マスカットなどのブドウ類、米や野菜などの優れた品種が赤磐市で生まれ、あるいはより良く育まれてきたのも、そうした恵まれた環境を背景に、先人たちが

「豊かな農産物だけでなく、赤磐市の強み」という意味では、県都・岡山市に隣接している社会地理的な条件は非常に大きい。赤磐市の中心部から岡山市の中心部までは、車でも鉄道でも30分前後で到達します。その地の利が、赤磐市の人口規模の維持をはじめ、各種の都市的発展に多様な好影響をもたらす要因にもなってきました。

あります。それは県全体に年間降水量が少ないこと、日照時間が長いこと、年間を通じて温暖であるといった、瀬戸内式気候特有の非常に恵まれた環境などを端的に示す愛称ですが、中でも赤磐市周辺は積雪や風水害などが少ない地域として知られております。そのため人々の暮らしや企業活動などにおいても、非常に安定した気象条件の下で行える強みがあります。

懸命に試行錯誤を繰り返して、創意工夫を凝らしてきたからこそと言えます」

そう語るのは友實武則赤磐市長だ。友實市長は旧赤磐郡山陽町の出身。昭和55(1980)年度から平成24(2012)年度まで、岡山市役所に32年間勤務の後、平成25(2013)年3月実施の赤磐市長選に当選し、本年度で就任10年目(3期目)を迎えた。

換言すれば、赤磐市誕生の25年前に県都・岡山市の職員となった友實市長は、赤磐市の誕生から約7年間を隣接する岡山市職員として見守り続け、さらに市制施行9年目から現在までの足掛け10年間、首長として故郷のまちづくりを担ってきた。



「実はそれが赤磐市の市長選に初めて出た際の、私の一つの動機にもつながっているのですが、赤磐市が誕生してからの約7年間、

### 赤磐市の強みをより強化するための「職住近接」の実現

力の醸成を阻害することにつながりかねない恐れもある。私は岡山市の職員時代から常々、そう考えておりました」

友實市長は就任以来、赤磐市の活性化に向けた最大の重点戦略として「職住近接のまちづくり」を掲げてきた。それは岡山市という巨大な文化・経済圏の中に位置するからこそ、持続可能なまちづくりに向けたキーポイントと言える。

隣接する岡山市役所の職員の立場から見てもいつも痛切に感じていたのは、赤磐市には多様な価値観を持つ若者たちが地元で継続的に働くことのできる雇用の場が、あまりにも少ないということでした。

と言いますのも、私自身、旧山陽町に生まれ育ちました。そして岡山市内の大学で土木工学を学び、卒業を機に改めて、自身の専門を生かせる就職先を模索したのですが、地元で働こうにも、雇用の場がほとんどありませんでした。そのことが最終的に、私が岡山市役所への就職を考えた理由の一つにもなっています。

そうした事情は4町合併を経て、赤磐市が誕生した後も続いていました。岡山市に隣接しているということからくる、ベッドタウンとしての短期的、表面的な発展は確かに見込めます。事実、赤磐市が発足した後も、人口は少しずつ減ってはいても、全体的には横ばいに近い状態を維持してきました。それは岡山市のベッドタウンとしての適性を見込んだデベロPPERが、大型の住宅団地を続けざまに建設したことも大きな要因になっています。

しかし、現在では一部の大規模な住宅団地において入居者の高齢化が一気に進行し、赤磐市もいわゆる『オールドニュータウン問題』に直面しています。それも含めて、岡山市に隣接しているというような外部要因だけに頼って市政運営していたのでは、せっかく多様な地域資源を持つ赤磐市の真の発展、自立



吉井城山公園から清流吉井川を望む

した都市としての持続的な発展には結び付かないのではないだろうか？ だからこそ、人口減少への流れがそれほど顕著になっていない今のうちに現状を打破し、子育て世代の若い人たちに関心を持ってもらえるような、ずっと住み続けていきたいと思ってもらえるようなまちづくりの基礎を固めなければ、遠からず人口減少の本格的な流れにのみ込まれてしまうのではないだろうか？ そのような観点から、有効な対策を少しでも早く実行していかなければ、いろいろな意味において、赤磐市の現状があまりにもつたいないと、思うのです(友實市長)

そうした危機意識をバネに、友實市長はトップセールスマンとして自ら精力的に活動し、市が交付している奨励金の対象となる企業だけで、7社の新規企業誘致と、5社(8



観光客にも大人気!! 春の桃畑はまさに桃源郷の趣

件)の設備増設(規模拡大)が実現している(本年4月現在)。

一方で果樹栽培、米・野菜栽培など伝統的な地域産業のさらなる振興に努めるとともに、近代的な農業経営の推進や新規就農を支援する《就農等支援センター事業》も推進しつつある。

さらに、子育て支援・教育支援などの拡充による子育て世代への各種支援の効果なども相まって、赤磐市の「人口の推移」は、全国の地方都市において人口減少が常態化している

# 赤磐市

(岡山県)

市 政 ル ポ



家族連れに大人気の吉井電天オートキャンプ場



四季折々の花が競い合うように咲く熊山英国庭園

現況の中、数値的には比較的ポジティブな傾向を実現しつつある。

例えば、国勢調査をベースにした数値では、赤磐市の人口は合併時(平成17年)の4万3913人をピークに、以後、少しずつ減少を続けているとされることが多い。「第2次赤磐市総合計画」(平成27/2015年12月策定)や「第2期赤磐市まち・ひと・しごと創生総合戦略」(令和2/2020年

3月策定)においても、そのように表現されている。しかし、本年4月1日現在の人口は4万3559人だ。ピークとされる平成17年の4万3913人より若干減ってはいるものの、数値に任意性の介在する国勢調査でなく、住民基本台帳による年度別・月別の人口の推移を見ていくと、人口のピークは平成18(2006)年1月の4万5644人だったことが分かる。それ以外の年でも、平成23(2011)年4月まではほぼ4万5000人台を記録しており、それ以後も令和2年4月までは4万4000人台をずっと維持していた。

合併時より人口が下回っているのは実質的に令和3(2021)年度だけなのだ。前述のように、しばしば合併を上回る人口動態が赤磐市では示されてきたし、現時点においても合併時の人口がほぼ維持されていると言える。さらに「大型住宅団地のオールドニュータウン化が進む」一方、「子育て世代の転入が少しずつ増えている」という現実もある。合併時より人口が若干減っているとはいえ、実質的にはむしろ、再び盛り返そうとする傾向も見えているのだ。

その背景には、赤磐市にもともと備わっていた総合的な地域ポテンシャルとしての「暮らしやすさ」に加え、友實市長が就任して以来の積極的な企業誘致や、地域産業の振興による雇用の場の創出、子育て支援・教育支援の拡充などの効果があることも間違いないだ

ろう。さらに、赤磐市の多彩な地域資源を背景に形成されてきた「子育てしやすいまち」「暮らしやすいまち」の魅力を、前面に出したシティブロモーションなどの各種施策・事業の効果も見逃せない。

## 赤磐市の暮らしやすさを証明する 古代遺跡群と晴れのまち

赤磐市がもとも備えていた「暮らしやすさ」とは、冒頭に述べた、瀬戸内式気候に育まれた大地の恵みとも言べき良質な農産物の存在が、端的に物語っている。良質な農産物を生み出すことのできる、気候が安定して温暖な地域性は、古来、誰にも暮らしやすかったはずで、事実、赤磐市には太古の昔から営まれてきた先人たちの暮らしの痕跡が濃厚に遺されている。

例えば、赤磐市・倉敷市・総社市・岡山市(代表自治体)が4市共同で申請し、平成30(2018)年5月に認定された日本遺産《「桃太郎伝説」の生まれたまち おかやまく 古代吉備の遺産が誘う鬼退治の物語》では、赤磐市から《両宮山古墳》と《岡山の桃》の2件が構成文化財に選ばれている。国指定史跡の《両宮山古墳》(5世紀の築造、山陽地域)は備前地方では最大規模の前方後円墳で、構成文化財としての《岡山の桃》は、赤磐市が桃太郎伝説に不可欠な岡山の桃の代表的な産地の一つであることを示している。



日本遺産の構成文化財・両宮山古墳(国指定史跡)は備前地方最大規模の前方後円墳



赤磐市はまさに古代遺跡の宝庫(国指定史跡・備前国分寺跡)

「この日本遺産の認定は、昔話の桃太郎伝説の原型とされる吉備津彦命の鬼退治伝説を中心とするストーリー仕立てになっているため、赤磐市からは2件の文化財しか入っていません。しかし、両宮山古墳の隣接地には、奈良時代に建立された備前国分寺跡(国指定史跡、山陽地域)があります。

また、やはり奈良時代に造られた仏塔跡とされる熊山遺跡(国指定史跡、熊山地域)や、中世の山城の貴重な遺構である周匝茶臼山城跡(市指定史跡、

吉井地域)などのほか、赤坂地域は古墳(跡も含む)だけで150以上も集中していることが知られています。

さらにそれ以前の縄文・弥生時代の遺跡もたくさん出土しており、赤磐には太古の昔から多くの人々が暮らしていたことが分かっています。それだけ暮らしやすかったのでしょうか(友實市長)

天候が安定し、晴れの日が多い赤磐市では、野外スポーツも盛んだ。中でも特徴的なのは、熊山地域を中心に行われている「ホッケーのまちづくり」だ。

日本におけるホッケーの競技人口は多いとは言えない。しかし、世界ではメジャースポーツの一つで、昨年開催された東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の際には、カナダ代表男子ホッケーチームが事前キャンプを赤磐市で実施した。赤磐市はニュージーランド代表女子ホッケーチームのホストタウンでもあり、両チームは市民の歓迎を受け、赤磐市熊山運動公園多目的広場で大会前の準備を行った。

また、日本では貴重な国際規格のホッケーコートを持つ赤磐市熊山運動公園多目的広場(日本ホッケー協会公認)では、平成30年から4年連続で日本選手権が開催されるなど、ホッケー競技者には広く知られた存在であり、全日本女子ホッケー代表チーム《さくらジャパン》にとってもゆかりの地となっている。



赤磐市ではホッケー全日本選手権が4年連続で開催中(中央の白ユニフォームの選手は赤磐市出身)

「ホッケーは日本でこそ地味なスポーツ競技のように思われているかもしれませんが、世界的に人気のあるスポーツです。赤磐市は日本におけるその中心地として国際的な認知をいただいております、オリンピックの際にカナダやニュージーランドの選手たちと交流できたことは、特に交流の主役を担った子どもたちにとっては、何よりの思い出になったことでしょう(友實市長)

赤磐市はバレーボールファンの間でも全国的な知名度を誇っている。赤磐市が誕生した平成17年に開催された「晴れの国おこやま国体」を契機に、Vリーグでは数少ない女子の市民クラブチーム《岡山シーガルズ》が赤磐市をホームタウンの一つに定め、交流が深まった。現在では山陽ふれあい公園総合体育館をホームコート(練習拠点)とし、合宿所も赤磐

# 赤磐市

(岡山県)

市政ルポ



ニュージーランド代表女子ホッケーチームにも忘れられない思い出となった赤磐キャンプ(地元の子どもたちとの交流風景)



カナダ代表男子ホッケーチームとはオリンピック後も交流継続中(事前キャンプ中の記念撮影)

市内に構えている。以来、岡山シーガルズは地域密着型チームとして赤磐市の各種イベントに参加。ジュニア選手育成や市民の健康活動をはじめ、さまざまな地域活動も行なうなど、赤磐市の市民生活にすっかり溶け込んで存在になっている。

例えばこうした一流アスリートとの日常的な交流は、地域の未来を担う次世代育成にも少なくない好影響をもたらすことが考えられる。同時に赤磐市では、令和2年度から開始した地域再生計画「未来づくり人材種まき

プロジェクト「サクラサク」の一環として、市内の中学生年代を対象とする人材育成にも力を入れており、そうした取り組みとの相乗効果も期待されるところだ。

市内の若者たちの多くは、中学校を卒業すると岡山市など市外の高校に通うようになり、その時点を境に地域との関係性が急速に薄まっていくのが従来の通例だった。地域再生計画「未来づくり人材種まきプロジェクト」はまさに、その部分にメスを入れようとする取り組みで、中でも市立桜が丘中学校をモデル校に実施されている《未来が見える学校プロジェクト》は各方面の注目を集めている。

「このプロジェクトは地域に愛着を持ち、何においても自分で考え、行動できるような若者を育成するため、学校運営においても地域との関わりをより強めたカリキュラムを組むようにしています。

宿題も強制ではなく、子どもたちに必要と思える内容の宿題を選ばせたり、テストの際にはノートの持ち込みを認めたり、成績が悪かった生徒には再チャレンジの機会を与えるなど、従来のお仕着せや暗記重視の教育でない、生徒たちの自主性を醸成するような学習環境の構築を目指しています(友實市長)

このような環境で育った若者たちには、何らかの形で、卒業後も《自分》をいろいろな意味で育んでくれた故郷への愛着が宿るのではないだろうか。

例えば、本年1月に「あかいわ広報大使」に



女子バレー・岡山シーガルズの選手による地域活動は市民にも大好評

就任した落語家の春風亭昇吉さん(赤磐市出身)は、東京大学を卒業した初めての落語家(令和3年5月には岡山県出身者初の真打ちにも昇進)として知られるが、昇吉さんの事例は、赤磐市から中央に飛躍した後はその知名度を生かして市の発展に貢献する先駆者のもの、と言えるのかもしれない。

以上述べてきたように、近年の赤磐市は職住近接のまちづくりを軸に、持続可能な地域づくりには不可欠な人口減少の抑制に向けた積極的かつアイデア豊富な施策・事業を、多角的に実施している。

《子育てするなら赤磐市》という、向日性に満ちたスローガンを掲げる「第2次赤磐市総合計画」が目指す「令和6(2024)年度末の達成目標「人口4万2000人の維持」も、本年4月1日時点の4万3559人からすれば、全く難しくないだろう。

(取材・文〓遠藤隆／取材日〓令和4年3月30日)